

経 済 情 勢

国 内

輸出が引続き高水準で推移する一方、国内最終需要も着実に上向いており、こうしたなかで生産、出荷とも増加傾向を続けている。

設備投資関連指標は、引続き増加基調にあり、個人消費関連も9月の百貨店売上げが再び伸びを高めるなど、総じて底固く推移している。この間住宅着工戸数は、民間資金分の増加を中心に引続き前年を上回ったが、公共工事請負額は前年をかなり下回った。

9月の商品市況をみると、非鉄、建材が下落したものの、鉄鋼、石油が上昇したため、総じてみれば保合い商状となった。9月の卸売物価は為替の円安から前月比微騰となり、消費者物価(東京)は、秋冬物高値衣料の出回りや生鮮食品の値上りから上昇したが、前年比では落ち着いた動きを継続している。

金融面をみると、8月のマネーサプライ前年比伸び率は前月並みとなり、銀行貸出約定平均金利は引続き低下した。この間9月の公社債市況は堅調裡に推移した。

8月の国際収支をみると、貿易収支の黒字幅が縮小したことに加え、貿易外収支の赤字も幾分拡大したことから、経常収支(貿易収支季節調整後)の黒字幅は前月に比べかなり縮小した。一方、長期資本収支は、本邦資本による対外証券投資が高水準を継続したものの、外国資本の対内証券投資が久方振りに流入超となったことから、赤字幅は前月を大きく下回った。

円相場(対米ドル直物相場)は、9月中旬まで欧州通貨大幅安のなかでかなりの軟化を示したが、その後月末にかけて小戻した。

生産、出荷は引続き増加

8月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比)*は、+0.7%と5ヵ月連続の増加となり、同出荷も+0.4%と前月に引続いて増加を示した(前年比は+11.0%、+6.5

%)。

* 以下増減率はとくに断らない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

当月の財別生産、出荷動向をみると、一般資本財(電子計算機、繊維機械)の生産、出荷が減少し、また耐久消費財(エアコン、電子レンジ、カラーテレビ)の出荷も減少をみたものの、生産財、非耐久消費財は石油製品を中心に生産、出荷とも増加したほか建設財(セメント・同製品、建築用金属製品)の生産も当月は増加を示した。

この間、生産者製品在庫は+0.8%と7ヵ月連続の増加となったが、在庫率は前月に引続き低下した。業種別にみると、石油(軽・重油)で減少をみたものの、一般機械(事務用機械)、電気機械(通信機械、半導体)で引続き積増しが行われたほか、鉄鋼(鉄鋼素製品、鋳鍛造品)、紙パ(段ボール原紙)で積上りがみられた。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、8月の機械受注額(船舶、電力を除く民需)は、-4.8%と3ヵ月振りに減少したが、前年比では+17.6%と高水準の伸びを続けている。また建設工事受注額(民間分、速報)は+12.5%と前月に引続き増加を示した(前年比+20.1%)。

8月の新設住宅着工戸数(前年比、速報)は、民間資金分が貸家の大幅増加を主因に5ヵ月連続の2桁増となったため、全体でも+4.3%と2ヵ月連続して前年水準を上回った。

個人消費関連では、8月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、猛暑のために前月好伸をみた夏物衣料、エアコン等が品不足気味となったほか、夏のレジャーに客足を奪われたこともあって、+2.3%と前月(+5.8%)に比べて低い伸びにとどまった。もっとも9月入り後の都内百貨店売上高は、中旬以降の涼気到来に伴い秋物衣料に動意がみられたこともあって、伸びを高めた。9月の耐久消費財の売行きをみると、VTR等は一服気味となったが、冷蔵庫、洗濯機等が順調に推移した模様である。もっとも乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)は-7.4%と3ヵ月連続して高水準の前年を下回った。

一方、9月の公共工事請負額(前年比)は、-8.2%と前月に引続き減少した。

8月の雇用動向をみると、完全失業率は2.77%と2ヵ月連続で低下したが、常用雇用、有効求人倍率(0.64倍)はともに前月比横ばいにとどまり、所定外労働時間は-0.8%と4ヵ月振りに減少した。

消費者物価は上昇

9月の商品市況をみると、非鉄(銅、アルミなど)、繊維(綿糸)が海外相場安か

ら続落したほか建材(型枠用合板)も一部メーカーの減産緩和の影響等から下落したものの、鉄鋼(条鋼類、厚板)が円安に伴う輸出成約増や民間建設向けの持直し等から続伸、石油製品(ガソリン、C重油)も反発したため、全体としては保合い商状となった。

9月の卸売物価は、国内物価は引続き落ち着いた動きを示したものの、輸出・入物価が為替円安の影響から小幅ながら上昇したため、総合では+0.2%の微騰となった。9月の消費者物価(東京、速報)は、秋冬物衣料の高値出回りに加え、生鮮食品が夏場の高温、雨不足に伴う野菜の入荷減から大幅に反騰したことを主因に、+1.6%と上昇した(前年比+2.8%)。

公社債市況は堅調を持続

9月の金融市場をみると、銀行券は月末休日による嵩上げ要因もあって、4,883億円の大幅発行超(9月としては既往最高、前年は還収超69億円)となり、月中平均発行残高(前年比)も+4.5%と前月(+3.3%)を上回った。一方財政資金は、国債発行純増額の縮小にもかかわらず、一般財政が法人税収の伸長等から前年とは様変りに揚超となったため、全体では10,793億円と前年(9,488億円)を上回る揚超幅となった。この結果、その他勘定と合わせた月中資金不足額は14,358億円と前年(9,556億円)をかなり上回り、日本銀行は市中保有の政府短期証券の償還のほか、貸出、買入手形の実行等によりこれを調節した。

この間コールレート(無条件物)は、上記のような資金不足地合を反映して、月中+0.1875%上昇して6.375%で越月した。一方手形レート(2ヵ月物)も強含みに推移したが、月末にかけては期明け後の資金余剰地合が織込まれるかたちで軟化し、結局通月では横ばいとなった(月末水準6.3125%)。

8月のマネーサプライ($M_2 + CD$ 平残、前年比)は、+7.7%と前月並みとなった。8月の銀行貸出約定平均金利(都銀、地銀、相銀平均)は、月中-0.007%と小幅ながら低下傾向を続けた。

9月の公社債市況は、米国債券市況の堅調な地合等を眺めた金融機関や証券会社の買い進みなどから、ほぼ通月上伸基調を持続した。こうした状況下、10月以降発行の長期国債応募者利回りについて、9月債に続き引下げが決定された(引下げ後利回り7.448%)。一方株式市況は一進一退の展開となったが、月末にかけては個人投資家等の買いから小幅上昇し、東証株価指数は前月末比+6.04の822.73で越月した。

長期資本収支の赤字幅は縮小

8月の国際収支をみると、貿易収支(季節調整後)は輸出が減少した一方、輸入が原油の大量入着もあって増加をみたことから、黒字幅を縮小したうえ、貿易外収支の赤字幅も幾分拡大したため、経常収支(貿易収支季節調整後)の黒字幅は、18.2億ドルと前月(25.2億ドル)に比べかなりの縮小をみた。一方長期資本収支は、本邦資本が対外証券投資を中心に引続き高水準の流出超となったものの、外国資本が対内証券投資を中心に5ヵ月振りに流入超となったことから、全体では31.8億ドルと前月を大きく下回る赤字幅となった。

8月の輸出(通関、ドルベース)は、+1.7%と再び増加したが、数量ベースでは-2.6%と減少した。品目別(数量ベース)にみると、テレビ、化学肥料、船舶などがかなり大幅な増加を示したものの、鉄鋼、ラジオ、合繊維物などが減少した。

8月の輸入(通関、ドルベース)は、原油(9月の石油税引上げを控えた大量入着)、木材、羊毛などの原燃料に加え、小麦などの食料品も増加したため+11.6%の大幅増となった(数量ベースでも+7.0%)。

なお、9月の輸出入(通関、ドルベース)は、それぞれ-0.7%、-16.1%となった(数量ベースは+2.0%、-10.4%)。

9月の円相場(対米ドル直物相場)は、月初より中旬まで海外筋のドル買いの動きなどにつれて軟化を続けたが、月末にかけては小戻した(月末水準、245円40銭、前月末比3円70銭の円安)。

(昭和59年10月19日)